

ますます.NETとの親和性を強める開発統合環境をチェック

# Delphi 2005

吉田 弘一郎  
YOSHIDA, Koichiro

## 誌上プレビュー

DelphiユーザーにとってWin32アプリケーション華やかなりしころに作成された膨大な資産の.NET移行は大きな課題のひとつだ。その問題をクリアしつつ、さらに.NET FrameworkのパワーをDelphiに吹き込む新しい統合開発環境がDelphi 2005。C#ユーザーにとっても、リファクタリングなどのオイシイ機能が搭載されていることは既報のとおり。今回はこの使用レポートをお届けする。

### Borland Developer Studio

Delphi 2005がリリースされ、数か月たちました。私もプロフェッショナル版を購入し、使い始めたところです。このDelphi 2005は、Win32用のDelphi 7と.NET用のDelphi 8（別名Delphi.NET）とC#Builderをまとめてひとつの開発環境（JBuilderに始まるガリレオと呼ばれるIDE）に収めたものです。でも、そこにとどまらず、数々の新機能や付加価値を与え、Borland Developer Studioと呼ぶにふさわしい製品になりつつあります。MicrosoftのVisual Studioの堂々たる対抗商品です。

気になるのはC++Builderの行方ですが、最近、Borland社も余裕が出てきたらしく、C++Builderユーザー向けの前向きなメッセージも出されました。そして、C++ Builderが、

Delphi 2005環境で走っているデモンストレーションビデオも公開されました。ですから、C++BuilderがDelphi 2005環境、すなわちBorland Developer Studio（略してBDS）に仲間入りするのも時間の問題であろうと思います。

でも、Borland Developer Studioという名称は、まだまだポピュラーではありません。実際、商品名としてはDelphi 2005のままです。デフォルトのセットアップフォルダ名もDelphiではなくBDSになっています。このBDSの中のサブフォルダ3.0に皆入れてしまうから、これはBDS 3.0ということなのですね。

図1がセットアップを開始したところです。3種類のコンパイラが並んでいますね。

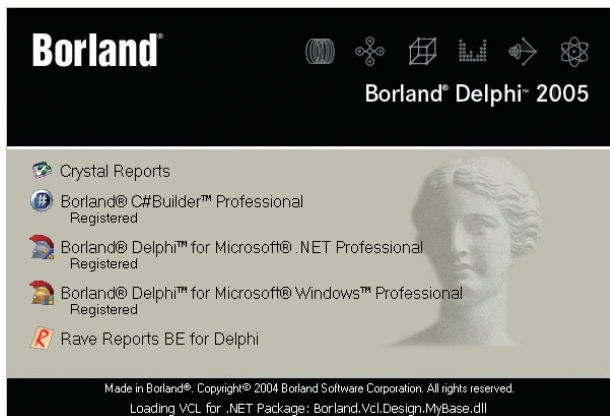
### 解説文書

最近、Borlandのコンパイラを買っても、マニュアルはCDにPDFとして入っているだけ。以前のように、印刷されたものが欲しいところです。1575ページもある立派なユーザーガイドもPDFで付いてくるのですが、それは「Help.pdf」という紛らわしい名前になっています。このくらいの分量になると、別売りでもいいから書籍の体裁が必要です。

参照ガイドは「Reference.pdf」なのですが、これはDelphi言語仕様を述べたもの。後で触れますが、今回のようにDelphiの言語仕様が進化した場合には、非常に興味深い読み物になります。249ページゆえ、分量としても手ごろ。

便利なのは、121ページのReviewers Guide。次のファイ

図1：セットアップ開始画面



ル名をWebで探すとすぐに見つかります。

- delphi\_2005\_reviewers\_guide.pdf

名前が示すとおり、これがあれば実際にモノを使わなくても、立派な評価記事が書けそうです。一見に値する資料です。

これ以外にも、Borland関連のWebには、何種類もの解説文書があふれています。便利な時代になったものです。

## Delphi 2005の種類

アーキテクト版、エンタープライズ版、プロフェッショナル版の3種類があり、今回購入したのはプロフェッショナル版。これらの違いは、Webですぐに見つかる「del2005\_faq.pdf」に要領よくまとめてあります。2種類のDelphiにC#という言語サポートは共通で、ライブラリとツールが異なります。項目ごとに見ると次のとおり。

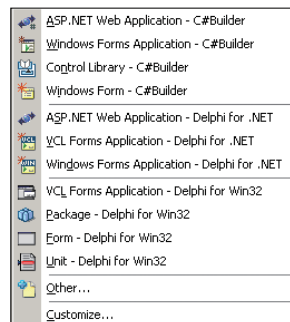
- ①Agile & RADはすべて共通。最近ホットなRefactoringや、DUnit/NUnit、History Manager、SyncEditなどはプロフェッショナル版でもフルにサポートされています。
- ②ECO (Enterprise Core Objects) はアーキテクト版のみ。
- ③ASP.NETでは、ASP.NETフォームのVisualなRADと、IntraWebのRADはプロフェッショナル版でも可。
- ④データベース関係では、RAD for ADO.NETリモートリングやdbExpress、BDPなどがプロフェッショナル版にはありません。
- ⑤ALM関連では、StarTeamのIDE用クライアントはプロフェッショナル版でも可。

## Delphi 2005の存在価値

Delphi 2005 (ないしはBorland Developer Studio) には、次のような2つの側面があります。

- ①開発環境の進化
- ②Delphi言語仕様の進化

図2：各種プロジェクトが並ぶ



今回は、実際にDelphi 2005を使ってみての感想ということで、①に話を絞ります。

### Delphi 2005開発環境

Visual Studioの場合と、同様の道を経て、Borland Developer Studioと呼ぶに相応しい統合開発環境になりました。この進化も2つに分類できます。

- 3種類の言語の同時サポート
- ツールの進化

[File] から [New] をクリックすると出てくるのは図2のようなメニュー。

C#Builder、Delphi for .NET、Delphi for Win32の主要なプロジェクト型が並んでいます。もう少し詳しく見ると図3のとおり。Borland文化の総決算という感じです。

ここで、VCLと.NETに関して復習。

昨年のDelphi8 (Delphi.NET) のレビュー (本誌2004年5月号) で詳しく述べた事項ですが、BorlandはWin32用DelphiとC++Builderで使われているVisual Component Library (VCL) を、ほぼそのまま.NETに移植し、VCL.NETとしました。おかげで、Delphi.NET以来、Delphiユーザは豊富なVCLを.NETでも使えるようになったばかり

図3：C#Builderでは残念ながらVCL.NETは使えない

